

台風19号水害

「今、取材はダメ。外部の人が施設に入るのはお断りしています」

昨秋の台風19号で大きな浸水被害を受けた埼玉県川越市の障害者施設が窮地に立っている。施設の復旧に半年間を費やし、この春にやっと再開となった直後、コロナ禍に追い打ち

をかけられた。千葉県の障害者施設では120人を超える集団感染が発生、職員たちは「いつこの施設でも同じことが」と不安を抱えながら「籠城」の日々を過ごしている。(佐藤直子)

川越の障害者施設 窮地

コロナ禍 厳戒「籠城」生活

三月に千葉県にある知的障害者施設「北総育成園」で、入所者と職員、家族ら百二十人余が新型コロナウイルスに感染する事態が発生した。けやきの郷も介助で職員が入所者と近づき、濃厚接触が避けられない。

自閉症者を支援する社会福祉法人「けやきの郷」は、施設すべてが床上浸水した昨年の水害からやっと立ち直ろうとしていた。施設が今どうなっているのか、電話をした。返ってきたのは、理事長の阿部叔子さん(81)の厳しい声だった。数年前、緑に囲まれたけやきの郷を初めて訪ねた。その施設は今、のどかな田園風景からは想像できない緊張に包まれている。



コロナ禍の中、「やまびこ製作所」で、マスクをつけてパレットを製作する入所者＝8日、埼玉県川越市平塚新田高田町で(いずれも「けやきの郷」提供)

5/10 藤野
重なる試練

職員らは「明日はわが身か」とびりびりしている。現場の感染リスクを少しでも減らそうと、けやきの郷では百人ほどの職員やスタッフのほかは中に入れ

千葉の施設で集団感染「明日はわが身」

ないと決めた。記者も例外ではなく、電話とメールで取材することになった。

「どんな重度の人も受け入れ、地域で働きながら自立を目指してきた」(阿部さん)というけやきの郷には、重度知的障害を伴う四十人が暮らす「初雁の家」、三十五人が五棟で暮らすグループホーム、工場の「やまびこ製作所」、作業所がある。いずれも自閉症の成人が対象だ。

これまでなら、週末は親元に帰る人が多かった。ところが、今は感染予防でままならない。自閉症の人にとっては大きな問題。親元に定期的に帰ることは、気持ちを安定させるためには欠かせないからだ。

施設では今、検温や手指の消毒がなぜ必要か理解できない人や、マスクで口と鼻が隠れた職員の顔を見て混乱し、マスクをはぎ取ろうとする人、落ち着きをなくしている入所者がいる。一方、自宅に帰ったまま

施設に戻れなくなっている人もいる。総務部長の内山智裕(46)さんは「感染リスクを避けるため、やむを得ない」と説明する。「多くの入所者は四、五十代。高齢の親たちは、障害のある子が長期間、自宅にいて介助に疲れている人もいます」

やまびこ製作所では工場を区分けし、感染が起きないようにしている。最低賃金を保障する就労継続支援A型事業所。所長の伊得正則さん(66)は「障害特徴のこだわりがプラスに働き、協調して働けないと言われた人たちが協力している。言葉だけでないコミュニケーションがある」と語る。

職員が自閉症の特性を踏まえた手順を教えると、くぎを打ち、角度を合わせ、呼吸を合わせて正確な仕事をする。いつもの年なら、年商は一億円に達する。それが今は六割に減り、事業をどうやって続けていくか頭を痛める日々だ。

「今、闘っているのはウイルス感染だけではない」。伊得さんは語る。そう、施設は昨年の水害、そして行政の冷たい対応にも立ち向かっているのだ。